

学生の関心を惹くための授業実践とその検証

安部 義和

A Review of Some Attempts to Attract the Students' Interest to My Lectures

Yoshikazu ABE

1. はじめに

私は本学に勤め始めて4年目を迎えている。1年目は非常勤講師として、2年目は入試対策部の参与、そして昨年から初等教育科の准教授として講座を担当してきた。毎年職種が変わるので、その都度新鮮な気持ちになれるのは大変有難いのだが、3年間という先の見えぬ日々の繰り返しに戸惑ったりもしている。

3年間の講義を振り返ってみると、学生たちは概ねよく話を聞いてくれているので感謝しているのだが、なかには退屈して居眠りを始める学生がいることも確かである。私がそれほど感じていなくても、熱心なクラスなどでは「居眠りしている学生に注意しないのですか。」といったような注文を付けてくる場合もあったりする。

そのような環境の中で、学生たちに楽しく積極的に講義を受けてもらうためにはどのような工夫をすればよいのであろうか。落ち着いて考えることの面白さを身に付けてもらえればよいのであるが、考える事を日常的なものにするための良い方法はないものか。また長年生徒指導の際目標にしてきた手法であるが、対象を否定することなく受け容れながら、過ちに気づいてもらうような具体的な方法はないものかなどと考えながらいくつかの実践を試みた。

発端となったのは高校長時代、進学資料（各高校独自に編集する進学のための資料冊子）に書いた巻頭言である。その中で、当時人気のあった「テツ and トモ」の『なんでだろう?』について触れたことを思い出したことからである。日常的な事柄にも一歩踏み込んで考えることの大切さを述べた内容であった。

講義中に眠らず、おしゃべりもせず、考えることを日常の中に取り入れる。そのためにはたとえお笑いのネタであろうとも思考の対象にすることが出来るということをお教えねばならない。言い換えると、大切なことは学生の興味のある領域で事を起こすことであるから、お笑いのネタは打って付けであるということにもなる。あるとき講義に飽きて関心を示さなくなった雰囲気の中で、「タカアンドトシの『欧米か!』はなぜ日本人に受けるのか。」と唐突に聞いてみた。学生のほとんどは「テンポのよさが受けたのだ。」といていたがなかなかそれ以上には進まない。「それでは次の時間に解答を用意する。」と言って、それまで考えておいてもらうことにした。この質問一つで学生全員の注意がこちらを向くことになった。講義の緊張が薄れかかると解答へのヒントをチラつかせたりする。すると、たちまちこちらを向くというわけである。案の定、次の時間が始まると同時に学生たちの興味はそのことに集まった。そこで徐に解答を披露するわけであるが、ここで

は臭いくらいにひねり回していかにも難しいことを考えているかの如く思考内容の高度化をはかる。学生たちに、高度な思考の世界に入ったことを自覚させるためである。この自覚は日常の生活と思考活動とを結びつける意味でとても大切な段階だと思われる。学生がもつ興味の範疇に題材を置いて、そこから思考の回路を発すると、思いがけない程の反応を示してくれる。人間である以上、考えることへの興味は生まれながらにして必ず持っているからである。

自分のすぐ周りに考えるための材料は幾らでもある。こんなものでも思考の対象になるのか、「小島よしおの『でも、そんなの関係ネエ〜、はいオッパッピー！』はなぜ受けるのか。」という問題を出したときはそんな雰囲気包まれた。やはりこれも課題として考えてくるように言って、次の週に私なりの解答を示し解説プリントを配布した。解答はあくまで私なりの見解であり、学生一人一人がどのような解答を持とうと徹底的に自由なのは当然である。

又あるとき、学生から講義中居眠りをしている学生のことについて指摘を受けたことがある。私は常々否定することなく肯定しながら導く手法が生徒指導上最も善い方法だと考えてきたのでつぎのような対応を試してみた。「居眠りするの悪いのか。」と学生に問い返したのである。学生は当然悪いことだと思い込んでいたので、何かを私に期待した。興味を示したわけである。「考えてみてください。」とあって、次の時間に私なりの解答を示したわけである。居眠りをする学生が一人もいなくなったというわけではないが居眠りをするということがどうか一人一人の学生が興味を持って考えたことは確かである。相手を否定して叱ったりするとその場の雰囲気が好ましくない緊張感に包まれたりしてお互いの距離を遠ざけてしまうことになる。そのようなことなしに、居眠りをした学生にも、それを指摘した学生にも同じように解決への道筋をつけるためには、肯定的な指導の手法に依ることが大切であるような気がしてならない。

2. 未知の扉を開く道標

(進学資料・巻頭言 平成15年)

今、流行の『なんでだろう?』、面白おかしく歌ったり踊ったりしているが、私たちが自分の身邊に疑問を発生し、解決していくことから人間としての基本的な生き方を会得してきたとするならば、面白いだのおかしいだのと言ってはおれないような気がしてならない。「人間は人間によってのみ人間になる。」(カント)と言われるほど究極的な社会性を持った存在であるから、知的好奇心や欲求がなければ、とても一人前などとは言えないのである。しかし、当世を見渡すに、考えることを一旦停止している人のいかに多いことか。言い換えれば、それほど考えなくても生きていける安易さが充満しているとも受け取れる。善と悪とでは善がよい、ということは誰しも理解していることであるが、善という選択肢が何一つ見当たらない状況は、実生活において、どのような場合でもあり得る事だと知っておかねばならない。残された選択肢の中から次善のものを捜し出し、耐えて再起を期すのも生きる上では大切である。嫌いな食べ物の中に栄養が豊富であったり、その当時は嫌いであった人の中に人生の師が居たりもするのである。しかし、わかっているけど踏み込めないと言う弱さを持っているのも又人間なのである。『なんでだろう?』はそこを一步踏み込んで考えさせようとする手段であると捉えれば、赤と青のジャージを着て歌い踊る二人の若者も感涙に咽ぶのではなからうか。私たちは生活の中で「疑問を発生し、解決する。」という方法を体験的に学んできたのであるが、とくに近年の学校教育では生きることへの障害を取り除くことに力を入れすぎて、乗り越えるべき学習環境を見失ってしまったとも言えなくはない。『なんでだろう?』はそのような社会に対して、「少しは考えなさい。」と言って鳴らしている警鐘なのかも知れない。言うまでもなく学校は皆さんが社会に出るための練習の場であるから、きついことがあっても苦しいことがあっても、そ

れを乗り越えるために一步踏み込んで考えるそんな場でなくてはならないのである。自分に最もふさわしい進路とは何なのか。その道に進むためには何をしなければならないのか。常に疑問と検索の活動を継続しなければならない。そんな時、この進路資料が役に立つと思う。現在の自分の姿を客観的に見ることも可能だと思し、将来の自分を先輩の姿に映し目標を持って頑張ることもできると思う。そして自分の姿が後輩たちの道標になるよう努力を惜しんではならない。鶴崎高校に学ぶ皆さんが代々この冊子を活用して豊かで実り多い人生が送れるよう願ってやまない。

3. 『欧米か!』論

問 題

「生徒指導とは極めて重要な教育実践の一つであるが、それは対象としての個人をどう理解するか、又どう受け容れるかということに始まる。とすれば、「欧米か!」はなぜ今の日本人にあれほど受け容れられるのか。「タカアンドトシ」をどのような存在として理解しているのか。という2つの命題を自分自身で確認しようとする態度が、生徒指導の入口の一つであると考えてもよいのではなからうか。(無理があるなあ!)」

解 答 (臭いくらいにひねり回して興味を引く)

「『欧米か!』はなぜ今の日本人に受け容れられるのか。それは欧米化したことによる表層的な繁栄の陰で失われかけている日本人の根元的な純粹さを慕う潜在的なアイデンティティー(統一性・一体性)への覚醒なのかもしれない。」

解説プリント

欧米文化と日本文化

文化としての食事か、生存のための食事か考えたりしていると、いろいろなことが浮かんでくる。食べるという行為が文化を創り上げることは確かなようである。米を食べる日本人にとっては降水や日照などの天候がもっとも大切

であるから、あいさつは天候を気遣うことから始まる。「今日は良いお天気ですね。この分だと…、あっそうそう、ところで…」と用件に入る。何より天候が大切なものだから、それを優先するあまり伝達機能には曖昧さがつきまとうのである。米を作るにあたっては村一番の米作りの真似をすれば事足りる。雨は村中のどの田んぼにも公平に降るのだから、きちんと真似をしさえすれば村一番の米作りに負けるとも劣らない収穫を上げうるわけである。従ってのけ者(村八分)にされるのがもっとも怖いのであり、自ずから集団性が身についてくるのである。又、台風などに対しては治山治水等で備えをするが、自然に対しては多くの場合共同作業と忍耐力とで立ち向かうのである。米を作る日本人の文化は総じて曖昧さと忍従的な態度で説明されている。一方、肉を食べる欧米人は、獲物を狩るために約束をきちんと守り、用件を合理的に伝えることを重視する。下手をすれば獲物が逃げてしまう、天気のことなど後回しである。獲物のいる場所は出来るだけ他人に知られない方が良いわけだから個別性が身についてくる。森を牧野に変えてたくさんの家畜を飼おうとするように、自然に対しては挑戦的な集中力で立ち向かうのである。日本人のように自然のお裾分けを戴くのは大違いである。日本庭園は自然のままを取り入れている山水であるのに、欧州の庭園はシンメトリーな構造で、自然に逆らって水を吹き上げる噴水であることが象徴的である。

近年の情報機能の進化は、同じであるわけがない二つの文化を、いやがうえにも同じにしようとする力となって働いている。本来の日本人はしっかりした日本人としての精神性を持っていたから欧米文化でも日本の心で包み込んで自分の身につけてきた(和魂洋才)。終戦後の日本人は余りの貧しさどひもじさのため、日本人としての大切な精神的な部分を犠牲にしてまで物質的な豊かさを求めた。そして豊かになった今、もはや欧米の文化を形として受け取りながら日本流に包み込むだけの精神的余裕を失った。欧米的なものに身(形)も心も揺す振られ

て、確固たる自己を見失っている。そのギャップが様々な閉塞性を生んでいる。同じになるわけがないものを同じにはいけない。『形』の世界は欧米であっても『心』のあり方はいつも確固たる日本でなければならない。このことに多くの日本人が気付いて、一人一人が自己改革すれば、この閉塞感を打破することができるのだが。

「欧米か!」とって軽んずるところに、見失ってしまった日本人としての本質を捜し求める自分を夢見ながら、日本人であるという無意識の確信に安堵しているのかもしれない。

4. オッパッピー論

『ウエーイ、でも、そんなの関係ネエ〜!』の研究

問 題

「小島よしおの『でも、そんなの関係ネエ〜!』はなぜ受けるか。」

解 答

「苦しい現実を逃避的に蔑み、自分を気楽な立場に置きながら、無責任に他人事に介入して、束の間の快さを楽しむ利他的な夢の世界に誘ってくれるからである。」

解説プリント

現代人はなぜ『そんなの関係ネエ〜』と発するのだろうか。『関係ネエ〜』立場に自分を置くことを望んでいるのだろうか。確かに関係ない立場に立つとこれほど楽なことはない。しかし、関係ない位置での存在は不安でもある。『そんなの関係ネエ〜』はこの楽と不安の間を往来する心の遊びだと考えてみたい。ここでの不安は自分の身を隠して他人事に介入するという異質の快楽にたちまち変質する。その上、自分勝手にいつでも安心に帰れるという担保のある不安である。

人間とは常に当事者からはずれて部外者の立場を望みながら、それでいてその事から関心をそらすことが出来ないという性癖をもっている。言い換えると無責任な立場に立ちながら、そのことに踏み込みたいという身勝手な願望を

持っているということである。匿名の苦情やインターネットの書き込みなど現代では容易にそれが出来る仕組みになっている。

真剣な野球ファンは必ず辛い思いをする。どんなに強いチームでも度々負けることがあるからだ。辛さから逃れるためにファンでないふりを装って、勝った時は密かに喜ぶことの方が気は楽だ。世の中はみんな楽を求めている。辛いこと悩ましいこととは一切縁を切って、身の回りを整理して気分よく人生を送ろうとしている。

権力が集中してくると周りをイエスマンで固めて批判という名の不快感を避け、居心地よくしたいのと構造的にはよく似ている。見渡すと、自分の内に対しても外に対しても恐れず勇敢に立ち向かい、幾度でも挑戦を試みるような意欲が希薄で、貧相な世相になってしまった。そんな危険を冒すより、自分は安全なところから眺めていよう、そして一言言わせてもらえればなおよい、などと思うような人間ばかりである。しかし、現実には厳しくて、そう簡単に安全な場所に置いてはくれないし、言わせてもくれない。納得するもしないも、あろうとなかろうと能力ギリギリの線で踏ん張らねばならないのである。

この環境から逃れたいという願望が『ウエーイ』と現実の厳しさを蔑むことに、他人に悟られぬように迎合しようとする。自ら創り出した無意識の領域に引き込まれると『関係ネエ〜』の世界に入り、しばしの間、解放的な気分を味わうことが出来るのである。その直後に『ハイ、オッパッピー』の言葉で「そんなはずないよな、」と現実に引き戻されるのである。利他的な隠遁生活を味わうのであるが、兼好法師や鴨長明のように世を捨てて、何にも煩わされることなく生きてみたいと思っても、俗世から決別するほどの勇気もエネルギーもない自分にほとんど弱り果てている現代人の姿が眼に浮かぶようである。食っても良いか悪いかくらい自分で判断したらどうか(賞味期限)、当たって死ぬなら食わねばよい。そこまで他人に頼らねば生きていけないほど弱くなった人間など何の魅力もあり

はしない。

小島よしおは言っている。弱い人間様にも申す『ウエーイ』。あなたを無頼の傍観者にしてさし上げましょう。でもそれは瞬きをするくらいの短い時間ですよ。それでもよければやりましょう。では、『でも、そんなの関係ネエ〜』ハイ！これが責任のない雲の上の客観的世界から現実を覗く束の間の安楽と虚構の特等席です。もうぼつぼつ終わりますよ。『ハイ、オッパッピー』、「そんなはずないよな。」と目を醒ますのである。オッパッピーはオーシャン・パシフィック・ピースの略だとか言っているが、本当のところは「はい、終・わ・り」と言っているのに違いないのである。

5. 居眠りの話

「先生は、遠慮せずに居眠りやおしゃべりする人にもっと注意をしてもよいのではないですか。」私は講義の締めくくりの試験やレポートの最後に学生たちの感想を求めるのであるが、これはそのときの意見のひとつであった。私自身そのように感じていなかったことでもなくはなかったが、目くじらを立てる程のものでもなかったので放っておいたというのが真相なのである。しかし、なんらかの反応を示さねばならなかったのも、後期の講座の最初の時間にこのことについて語ってみた。

「私は、人間のすることに無駄なことは何ひとつない」と思っている。必要なことと必要でないこととは人間が勝手に決めたことで、根拠はひよっとすると人間のうぬぼれなのかも知れない。私たちは、科学的な合理性を追求することによって便利さや安易さを手に入れた。しかし、あれほど欲しがっていた便利さや安易さは私たちに何をもたらしたか。私たちから勤勉さや人に対する優しさなどを奪った張本人なのかも知れない。不必要とされた不合理は、人間の心に苦勞という名の多少の辛さを強いるかもしれないが、他人の手を借りてでなければ生きられない自己の存在を明確にするとともに、自分を取りまく環境や人々に感謝の念をこめて優し

く接しなければならぬということを教えてきたのではないか。

ずいぶん前の話になるが、欧米各国の教職員とのディスカッションの中で、「私たち日本人教師はエコノミックアニマルを育てるのは上手いのだが、国際貢献を教えるのはとても苦手です。どうしてでしょうか。」と投げかけてみたことがある。しばらく沈黙の時間が流れたが、カナダの先生がこう言った。「国際貢献を教えるには信じられないくらいの長い時間がかかるのですよ。」私はこの言葉の中に「人間のすることに無駄はない」という一つの真理を得たような気がしたのである。無駄を省いて安価で性能のよい自動車を作ってトヨタは世界一になった。日本人の成しえた偉業として素晴らしいことである。しかし、徹底して無駄を省くこの方法が学校での教育に入り込んできているとしたら、もしこの考え方が教育の場で支配的になってきているとしたら、と考えると怖い気がする。「無駄を省く」ことは、どのような場合にでもよいことではないのである。私たちが無駄だと考えるものの中にひよっとすると国際貢献という名の卵が今にも孵ろうとしているかも知れないのである。講義中に居眠りすることは、決してよい行為だとは言えないけれど、18歳を超えた年齢に達していることを考えれば、自分の問題として自分の中で改善することが大切である。そして、その度に精神的に大きくなっていけばよいのである。中にはそのことに気づかず一生を過ごしてしまう人もいるかも知れない。その人は幸せだとはいえないし、気の毒ではあるけれど、それはそれで悪くはないのである。なぜならこれは神様の仕業だからである。

居眠り論の展開（なぜ神はそうしたか）

「人間のすることに無駄はない」一般的によくないとされているどのような行為もその人をより善くするのに役に立つからである。（当然居眠りも含まれるのである）問題はいつ気づくかということであるが、早めに気づいて自己改善を行い、人格形成に役立てる人、中には死ぬまで気づかぬ人もいる。それはそれで良い、先

にも言ったように神がなされたことだからである。神の下には皆平等であり身分などで差をつけるわけにはいかないから、そうやって善人や努力家、真面目に頑張る人が報われる世の中を確かなものにしようとしているのである。もっと勉強すればもっとよい点数が取れることは分かっているのにそれができない。しかし、よくよく考えてみると分かっていることがみんなできたら大変だ。競争がきつすぎて、並みの頭脳ではもたないだろう。頭が破裂して、皆神経症ということにもなりかねない。それで、怠惰という小悪魔に勝利した人たちに褒美を与えるために神が仕組んだことなのだ。その上、不平不満をもたれぬように「気付かない。」という環境をもつかったのである。私たちはその掌の中で幸せな自分をつくる努力を継続しなければならないのである。「神は人間を平等にするために、人間を総じて怠け者にした。」のである。

6. おわりに

つまらないことを考えるのは、つまらないか。つまらないことを考えるのも意外とつまらない。考えないよりは考えることの方が余程ましである。日常は退屈であるうえに、つまらないことがあちこちに転がっている。退屈しのぎに考えてみてはどうだろう。つまらないことは本当につまらないのか、などと。このことが考える生活の端緒になるかも知れないし、次々に知的欲求を刺激し始めるかも知れない。今の一般的な人間はあまりにも考えることを省略した生活に浸りきっている。なぜなら周囲がそのような環境を作り上げてしまったからである。手取り足取りの余分なおせっかいが『自分で考えること』だけでなく『想像すること』すら我々から奪い去ってしまった。『忍耐』などは勿論のこと『ややこしいこと』、『いやなこと』を一切残らずまるで悪者のように葬り去った。我々は無意識のうちに考えて自分なりの世界（個性）を作り上げるような環境を奪われたから、意識的に考えるよりなくなった。これは徳が身に付く課程の昔と今との違いによく似て

いる。昔は不便な環境が自ずと徳を身に付けさせた。親の手伝いをするという徳は、手伝うことが必然でなくなった今の世では、意識的に行わなければこの徳は姿を現さない。世の中全体が皆で申し合わせたように考えることをお休み中である。近年の若年層による犯罪への短絡さはこの現れであろう。だから一人ひとりが意識的に考えることを始めなければならない。それには身の回りのことから始めるのが手っ取り早いのである。このことを学生に教えたい一心である。少しは伝わったのか、最近ではイッコー『どんだけえ〜』はなぜ受けるのか、との問題提起も学生の中からあった。が、この問題を分析するには、私は余りにもこの言葉の仔細なまでの脈流を掴みきっていないというのが本当のところである。まだまだ若者の興味の範囲を探り続けなければならない。「あなたは どう思うか、皆で考えてみよう。」と投げかけているところである。流行している間に分析が果たして間に合うかどうか。私も予期せぬところで考えさせられるのである。まさに「我思う、故に我在り」の初歩的な第一歩である。

参考文献

森 信三著 (1997) 修身教授録 致知出版社